

# 鹿児島観光新聞

KAGOSHIMA SIGHTSEEING NEWS PAPER

## Volume 01

# 「YS」と「団塊」

初の国産旅客機「YS-11」初就航以来40年以上の歴史と思い出と共に。「ありがとう」

2006年9月、最後の就航



http://www.jac.co.jp/

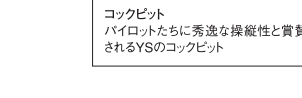
「ヨロコビ、ゴトウ」という大きな音は陸離前も空高く舞い上がってかちまわらない。「ああ、飛ぶぞ」「懸命に飛んでるぞ」。そんな機体の必死感を感じるほどだ。最初も最後までフル駆動。気流の悪さの中を飛ぶと、びくびくとした飛行感「空気が塊」としてこれほど感じさせてくれる飛行機も珍しい。賑やかに飛び続けたYS-11は、エンジンと着陸した。エンジンがさっと停止し、突然の無音。種子島空港を包む静けさに溶け込む。

YS-11は初の国産旅客機で、計182機が製造された。1965年の初就航以来40年以上働き続けてきたが、最後の4機が今年9月末まですべて退役し「国内の民間航路から姿を消す」。

少し遅れて社会に飛び出し、近く定年を迎え始める団塊の世代に重ねてしまう。微妙に機体を振りながら離発着するYS。やや小太りの決してスマートではない機体もどこか共通する。YSの退役は機材の耐用に限界が生じたからではない。海外の途上国などに売却され、新たな役割を担うことになるはずだ。再上という点でも「団塊の今後と似て映る」。



格納庫  
飛行から帰ったYS格納庫で入念な整備を受け出番に備える



コックピット  
パイロットたちに秀逸な操縦性と賞賛されるYSのコックピット

### producers column.

#### プロデューサーズコラム 「新装」にご期待を

鹿児島県観光プロデューサー 其田 秀樹

鹿児島県観光連盟が定期的に発行しております「旅情報-鹿児島県観光ニュース」の装いを、今号から一新しました。紙面がぐんと広くなりました。情報の発信力がより強まると期待しております。

主な改編点は、①これまでの季刊から隔月刊の年6回発行に ②ページ数を4ページ増の16ページ(いずれもフルカラー)建てに拡充 ③判型を現行のA4からタブロイド版に ④各号の発行部数を倍以上に。などです。年間の総ページ数はこれまでの4倍以上に、スペース総量は約7倍に拡がり、掲載情報量の一層の拡充を図ることが出来ます。これまで以上にタイムリーで斬新な記事を心がけます。広告の掲載も新たに導入させていただきます。今後は、地域の旬の動きなどを含む幅広い新鮮で活きた情報を積極的に掲載してまいります。

新たな「旅情報」へのご支援を引き続き賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



日本エアコミューター乗員査察部 YS査察グループ長 YS-11型機 機長 廣瀬三省さん

YS-11型機の操縦席に座って19年を数える廣瀬さんは、YS-11型機の良さをこう話してくれた。「お客様を乗せる飛行機の中では、YSはオートマチックな部分が少ない型機なんです。だから自分の手や体でレバーを引いて、空気の力を感じることができて、やりがいがあります。それがYSを操縦する醍醐味ですね」。約2500メートルの高度で飛ぶYSは、桜島約2個分の高さで飛ぶ。ジェット機に比べて低空飛行なので、ジャンボジェットなんかでは絶対に見られない細かな風景を目の当たりにできるのだ。廣瀬さんのおすずめは、種子島から大隅半島上空を飛んで、鹿児島空港に向かうときの一連の景色だと言う。「まだ日本が戦争を行っていた頃、飛行機の特攻隊たちは南の空を目指して、片道だけの燃料を積んで飛び立ち、若い命がたくさん失われた歴史を考えると、安全運転をお客様を無事に目的地まで届けて笑顔で帰ってくるのが、彼らに対する供養になるのではないかと思います」。空から見る、ワインレッドの夕焼けの色は言葉にできないほど美しいですよ、と目を細めて話してくれた。

指導客室乗務員 大日方 恵子さん



「小さい飛行機なので、お客様との距離が近いのです」。インタビュー中に一度も崩れない姿勢とは裏腹に、笑顔がとても優しい大日方さんは、YSに乗って11年目。最初は戸惑うこともあったが、南西諸島を飛ぶ事が多い飛行機であるが故に乗ってくるのは地元の方。何かミスがあったり、時間が遅れたときでも「よかが、よかが(いいよ、いいよ)」と笑顔に向けてくれるお客様に逆に励まされることばかりだったと言う。

「春に島から異動になった教師の方の見送りに学校の生徒全員が空港まで来んです。生徒はみんな飛行機が見えなくなるまで手を振っていて、島の人の温かさが伝わってきます。大きな空港ではちょっと見られない、素敵なドラマが生まれる飛行機なんです」。悪天候で船がキャンセルになるときでもYSはたくましく飛ぶ。YSから見える間近な風景をもっと楽しんでらおうと、客室乗務員たちが手作りしてルートマップを作ったものも、YSならではの。最後に、現役を引退するYSにメッセージを聞いた。「おつかれさま!という感じですが、乗っているお客様の方が、自分よりYSに詳しくって教えてくれることもありました。皆に愛されている飛行機です」。



長瀬さんはモニメント完成記念誌に寄せたメッセージで、「あの聖地に今、人間の力の証、情熱の証、連帯の証、つまりは、頼もしい人間の、生、そのものの象徴として、新たな命が吹き込まれたモノメントにしている。桜島は音楽の聖地として新しい顔を加えた」。

### 桜島に「長瀬さん記念碑」

桜島に集った75000人の思いが結実。歌手の長瀬剛さんが2004年8月にオールナイトコンサートを開いた桜島の赤水探石場跡地(鹿児島市桜島赤水町)に、桜島フェリー降り場から徒歩約30分(記念のモノメント)が建立された。3月19日の除幕式には長瀬さんもお出席し、訪ね掛けたファンら約15000人に熱い思いを感謝を伝えた。

「コンサートの熱い情熱を未来へ語り継ぐ」と民間や県、市など18の団体が建立委員会を結成し、一般への募金活動を行ってきた。モノメントは東京八王子の彫刻家、大成浩さんが制作し、叫びの肖像と名づけられた。高さ約3.4メートル、約50トンの桜島の溶岩から、桜島に向かつて叫ぶ男性の頭部とギターのネック部分などを取り浮かび上がらせた。式典後、長瀬さんは「桜島など5回、熱唱会場は熱気に包まれた」。